

知的障害特別支援学校高等部における生徒と教師の
省察に着目した授業づくり：
校外での作業学習を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 靖弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024860

知的障害特別支援学校高等部における 生徒と教師の省察に着目した授業づくり

——校外での作業学習を通して——

水野 靖弘

Lessons Focused on Students' and Teachers' Reflections in the Upper Secondary Division of
a Special Needs School for Students with Intellectual Disabilities

: Work Study Outside the School

Yasuhiro MIZUNO

1 問題と背景

2015年8月、中央教育審議会の「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」において、次期学習指導要領が目指す姿が示された。新しい時代においては、技術革新が急速に進み、情報化やグローバル化といった社会の変化が加速度的に進展するとし、こうした激しい変化の中でも、社会的・職業的に自立した人間として生きていけるように、新しい時代に求められる資質・能力を確実に育成していくことが必要であると示されている。この中には、特別支援教育の理念や特別支援学校における「キャリア発達を促すキャリア教育」のこれまでの考え方とつながる部分も含まれていると考える。松見(2017)は、「これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けたりするために必要とされるアクティブ・ラーニングの視点による『主体的・対話的で深い学び』の実現では、主体的な学びの過程が重要とされ、学習者の主体性が重要視されている」と示している。新しい教育においても、これまで大切にされてきた子ども主体の授業づくりや子どもの主体的な学びが重要であることが推察される。

2011年4月の静岡県教育委員会の「静岡県立特別支援学校施設整備計画」において、静岡県内の知的障害特別支援学校高等部の整備拡充や近年の動向について触れられている。知的障害者を対象とする特別支援学校高等部では、中学校特別支援学級からの進路希望が増え、本校中学部から進学した生徒との教育的ニーズの隔たりが課題となっていること、また、共生・共育推進の観点等から、小学校や高等学校内への特別支援学校分校設置が進められており、特別支援学校分校設置は、静岡県の教育の特色の一つとなっている。平成16年度より知的障害が比較的軽度な生徒を対象とし、職業教育の充実を図り卒業後の就労を目指す高等部分校が県立の高等学校内に設置されており、2018年1月現在、県内に、職業教育の充実を目指す高等部分校として6分校設置されている。2016年4月の静岡県教育委員会の「静岡県における共生社会の構築を推進するための特別支援教育の在り方について―「共生・共育」を目指して―」では、これら高等部分校の「共生・共育」の推進やセンター的機能を発揮できるといったよい影響、また、卒業後の就労を目的とした教育課程の編成による成果について触れられている。

知的障害特別支援学校高等部分校である研究協力校において、特色ある学習として、校外での作業学習があげられる。「多様な職種において必要な実地的な知識・技能の獲得と地域での体験、現場実習を通しての就労準備」をねらいとし、1・2年次は、年間を3期に分けて実施し、1年間で3つのグループを体験するシステムとなっている。3年次は、1・2年次の学習をもとに自己の適性、希望を考え、卒業後の就労を前提に選択するようになっている。生徒にとっては、職種を知り、幅広い経験ができるだけでなく、自分の課題や適性を知るといった自身と向き合う

貴重な学習となる。その学習をより充実したものにするために、生徒がより主体的に学んでいくことは大変重要であると考え。一方、教師は、年間を通して一人の教師が一つの分野を担当し、1グループ5～6人の生徒と事業所に出向き、指導を行っている。基本的には、事業所との連携、学習の組み立て方、生徒の指導などを一人で担っている。そのため、校内での作業学習のように教員同士が授業を見合い、指導方法を相談・検討して進めることが難しい点がある。また、校外での作業学習でのねらいの下、具体的にどのように生徒を支援していくことがよいのか難しい現状も見受けられた。校外での作業学習を進めていく中で、伊藤(2008)や塚野(2014)が示す「自己調整学習」の考え方の活用、また生徒を支える教師の支援という観点からは、佐藤(1994)の反省的実践家の考え方を基にした高橋(2004)の特別支援学校での自らの指導を省察すること、守屋ら(2012)の示す特別支援学校でのメンタリングの活用等について考慮することにより、生徒のより主体的な学びの促進、校外での作業学習を支える教師の生徒に対するよりよいアプローチにつながらないかと考える。中央教育審議会(2016)の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」では、学びの質を高めていくための授業改善の手立てとして「主体的・対話的で深い学び」が重要であるとの指摘がある。校外での作業学習において自己省察という観点から「主体的・対話的で深い学び」について考えることにより、より個々の生徒の成長を促すことが期待できるのではないかと考える。

2 研究の目的

本研究では、校外での作業学習の現状について、現場教師の感じていることについて明らかにする。また、校外での作業学習において生徒の省察や教師の省察に着目して授業づくりを進めていくことにより、生徒のよりよい学びの促進、担当教師の授業づくりへの効果について考察することを目的とする。

3 研究の方法

校外での作業学習の現状について、校内教職員への質問紙調査を実施し、校外での作業学習における現場教師の考えや感じていること(校外での作業学習の押さえ・良さ・困ったこと、悩んだこと・解決方法・発展していくために)について明らかにし、その特徴について考察する。また、並行して、2つの実践に携わる。生徒の省察に着目する取り組みとして、生徒の思いや考えを知るためのワークシートの活用(図1)や仲間

今日の授業で		月 日 () 名前()
①どれくらい考えたか？	②自分でこれほどできたと思うことは？	
<small>この授業は、</small> <small>あつ</small> <small>おもしろかった</small>	----- ----- なぜできたと思う？ -----	
	③今日の活動中一番考えたことは？	

	④今日の活動中困ったことや疑問に思ったことは？	

	⑤仲間と話してみても思ったことは？	

※振り返ることが大事なので、書くのはちょっとと言う人は、先生と話してみてください。

図1 生徒の思いや考えを知るためのワークシート

や教師との対話の場面(主として昼食後のミーティング)を設けることにより、生徒の思いや考えに着目しやすくしたり、表出しやすくしたりすることを試みた。また教師の省察に着目する取り組みとして、授業ごとの省察記録とともに周囲の教師との対話をより授業に生かしていくことを試みた。生徒の記述や実際の活動の様子を考察し、このような取組を通して、生徒の学びにどのような変化が見られたかについて考察する。また、生徒の学びを支える教師の考えや支援の変化について、省察記録や実践中の担当教師のインタビューより考察する。

4 結果およびそれぞれの考察

(1) 校外での作業学習に関する校内教職員への質問紙調査より

校外での作業学習において、実際の現場で働くこと、様々な職種を経験ができることといった体験そのものが生徒にとって貴重な学びとなっていると捉えられていることが特徴的であった。「押さえ」では、体験を通して、働く意欲につなげること、働くことの基本を学ぶことや、働くことへの理解、自分の適性や進路について考えること等、働くことに対して自身の知識や技能を身に付けるだけでなく、自身の考えを深めたり、自己理解にもつなげたりできるような学びを意識していることがうかがえた。「良さ」については、実際に現場で働くことを通して、働く現場の緊張感や責任感を体感できること、外部の方から直接評価をいただけることがあげられていた。「困ったこと・悩んだこと」では、生徒の活動に関する内容、現場での要望と生徒に学ばせたいことの擦り合わせといった内容が多く取り上げられていた。その他、受け入れ先の方々とのコミュニケーション、担当教師の引き継ぎについてもあげられており、受け入れ先との連携や教師間の連携についての難しさも窺われた。「困った時・悩んだ時の解決方法」としては、「相談」というキーワードが多くあげられていた。その中でも学年主任や進路指導主事、経験のある先生方がキーパーソンであることがうかがえた。「発展するために」では、「教師」の追求していく姿勢について多く触れられていた。教師間の作業学習についての共通理解を深めること、情報共有の機会や研修の積み重ねを通して校外での作業学習を充実させていくことについての言及があり、担当教師一人で考えるのではなく、学校全体で考えていくことが重要であることがうかがえた。また、受け入れ先との信頼関係や共通理解も重要であることについても多く触れられている。

(2) 校外での作業学習をより深めるための工夫(生徒の省察や教師の省察への着目)より

校外での作業学習において2つの分野において実践を行った。以下、事例1について記す。表1は、事例1高3販売・サービス分野の概要である。

表1 事例1高3販売・サービス分野の概要

担当教師・生徒期間	20代男性教諭(初任から3年目)・生徒5人(男子4人、女子1人) 4月～9月まで週1回1日の作業学習 計11回
この分野における生徒達が主体的に働く姿	・現場の方とコミュニケーションをとり、自分から積極的に仕事に取り組む姿 ・仲間と協力し、効率よく作業を進める姿 ・お客様を第一に考え、お客様に喜んでもらうためにはどうしたらいいのか考えながら意欲的に仕事に取り組む姿
活動内容	花壇整備、駐車場白線引き、館内清掃、調理補助、配膳、下膳、宴会場セッティング
生徒たちの状況	高1・2年と校外での作業学習での職種体験、産業現場等における実習の経験より、自己の適性や希望も少しずつ見えてきている段階である。活動当初は、実際の活動状況がわからないため、生徒は活動内容を想像した中で、目標を立てて活動に臨む状況である。
受け入れ先の状況	・仕事が多岐且つ固定されていない。(天候にも左右される、間が空いてしまう) ・館外作業では、外部評価をいただくことがなかなか難しい。 ・進め方については、生徒達が考えて進めることができる仕事が多い。
担当教師の不安	・業務内容の規準や判断の理解が十分でないこと。 ・受け入れ先との関係づくりを十分に構築できるかどうか。

①生徒達が仕事内容を学ぶだけでなく、どのように仕事を進めるかや人とのやりとりについて考える場に(ワークシートや対話より)

生徒達は、全体的に普段よりもより考えて活動していると回答している。実際の活動において、仕事の進め方については自分たちで考えて進められる場面も多く設けられる状況があり、生徒達

も自分たちで考えて仕事をしていたと実感できることが多かったのではないかと推察される。「生徒ができたと思うこと」では、仕事や活動そのものについて取り上げられていることが多く、「なぜできたと思うか」の項目では、自分の行うことがしっかり理解できていたこと、自身の目標(留意点)を意識できていたこと、他者のアドバイスや行動を参考にしたこと等があげられていた。「一番考えたこと」では、生徒の実感として、仕事そのもの(正確さ、ミスなく)を意識するだけでなく、仕事の進め方(段取りや分担)においてもよく考える場面があったことがうかがえ、生徒が学ぶ場面は「仕事をする」だけでなく、「どのように仕事を進めていくか」という部分にもあり、そこにも大切な学びがあったことがうかがえる。「困ったこと・疑問に思ったこと」での生徒の記述では、仕事のそのものの困り感の他、人とのやりとりに関する内容も多く見られた。そして、困り感や疑問点は生徒が考える貴重な機会となっていた。

仲間や教師との対話の場は、困り感や疑問点を共有したり、それらを解決するための気づきを得たりする場となっていた。対話を通して、表2のような学びが得られていたのではないかと考える。

表2 困ったことを仲間との対話を通して解決していく中で得られた生徒の学び

当事者	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いや考えを表出する、言葉にして伝えることの大切さについて考える。 ・共感してもらえ、一緒に考えてもらえることの安心感を実感できる。
仲間	<ul style="list-style-type: none"> ・困ったことを相談して解決する価値を高められる。 ・自分では気づけなかったことや次に向けての具体的な行動に気づく。 ・他人事と思わず、様々な角度から相手の立場に立って考えることをしやすい。
全体	<ul style="list-style-type: none"> ・自分にも役立てられる気づきを得られる。 ・仕事がしやすくなる(業務の効率化)。 ・思いやりや感謝の気持ちをもって仲間と活動に取り組むことができる。 ・仕事をチームで行う良さの一つを感じられる(一体感の高まり)。

②生徒個々が自身の学びを深めていく場に(生徒Cの作業日誌の記述より)

活動当初は、仕事に慣れる、あいさつ・返事といったどの仕事においても必要なことが目標としてあげられていた。初めての仕事の中では、従業員や教師に確認することが多くあり、また、仲間と関わりながら仕事をしていく場面が多かったことから、自分から行動する(特に相談することへの意識が高まっており、目標や活動の振り返りのコメントの内容も他者との関わりややりとりに関する内容に変化していた。さらに、活動中の仲間とのやりとり、昼のミーティングを通じた仲間とのやりとりの経験を重ね、終盤では、他者との関わりの中でも、ただ自ら発信するということに留まらず、相手を考慮しての発信を意識することを目標として掲げ、より深い他者とのやりとりを意識して実践している様子が見られた(表3)。自身のまとめの振り返りでは、協働していく中で、自分だけでなく、周りの人の作業の状況を見ること、相手の意見も聞き判断すること、積極的に声を掛け合うこと、話し合いを重ねることの大切さ等についてあげられており、現場での本物の体験を通し、この分野における活動ならではの学びを得ることができていた。

③生徒の学びを支える教師の学び(担当教師Gの自身の省察や先輩教員との対話より)

周囲に日常的に相談することへの価値についての気づきを得られていた。校外での作業学習において、これまでは、依頼された仕事を責任をもって遂行するという思いが大変強かったが、加えて、生徒がそこから何を学ぶかについてよりポジティブに考えようとする意識、活動に対する価値付け、仲間同士で対話することの価値等についても再考されていた。校外での作業学習における生徒の学びや価値について深めている様子も見られた(以下インタビュー記録からの抜粋)。

…これまでの校外での作業学習での経験から、従業員の方々にできるだけ指示をもらって仕事をしていきたいと思っていたが、必ずしも従業員の方からの指示をもらうことが一番ではないのかも考えるようになった。指示がもらえない場合でも、そこに生徒が考えて取り組む場面をつくることで、生徒にとって新しい学びが生まれるのかなと思う。自分自身にも意識の変化があった。自分の支援や指導が、「ただ、必死に事業所から提供された仕事をやろう。」から、「自分たちで相談して考えて、分担して取り組もう。」といった、自分たちで考えて仕事を進めるような環境や機会を意識して作ることに変わっていったと思う。校内の作業ではこのようなことを意識していたが、校外では言われたことをしっかりやるという意識が今まで強かった。一生懸命やる中にも、自分達で考えて、自分達で分担してという場面が多くできたことはよかった。…

…館外の仕事は、従業員の方にもなかなか見てもらえない仕事で、活動する意味について疑問に感じている部分もあった。従業員の方々やお客様との関わりも少なく、その中で、自分達だけで仕事を進めていくことに戸惑いがあり、自分自身が館外の仕事には消極的であった。しかし、進路担当のアドバイスを聞く中で、お客様の立場に立って考えると、その仕事の意味(ここでは草取りやゴミ拾い)や必要性について、深く考えることができ、最後の最後になってしまったが、生徒達にも考える機会を設けることができた。…

表3 生徒Cの日々の授業の目標と振り返り(作業日誌より)

日付	目標	目標に対する反省
4月21日	・自分から元気よくあいさつ、返事をする。 ・仕事に慣れる。	担当考様にあいさつする時に、少し緊張してしまっただけ、みんなとあいさつをしたり元気よく大きな声でできました。なので、今度はみんなと元気よくではなく、自分一人でも元気よく大きな声であいさつできるようにしたいです。
5月26日	・あいさつ、返事を自分から元気よくする。 ・時間を意識しながら作業する。	今日は前回よりもあいさつや返事ができたと思いました。わからないことを聞きに行くことが前よりもできるようになったかなと思いました。けど先生のアドバイスを聞いてできたので、次は自分からできるようにしたいです。あいさつを続けていきたいです。
6月23日	・あいさつ、返事を自分から元気よくする。 ・わからないことや困ったことを自分から聞きに行く。 ・作業内容を思い出しながら仕事をやる。	今日は久しぶりの白線引きでわからないことがあったけど、仲間と相談したり、アドバイスを聞きながら作業をすることができました。声を掛け合うことで自分が何をしたらいいかわりに周りの様子を知ることができたので続けていきたいです。
7月14日	・作業内容を思い出しながら作業し、わからないことや困ったことを自分から報告、相談に行く。	今日は久しぶりに宴会準備だったけど、担当の方の指示を聞き作業ができました。白線引きでやりづらいことがあったけど、工夫して作業することができました。工夫したことをもっとわかりやすくみんなに伝えられるようにしたいです。
9月15日	・自分で工夫したことをわかりやすく伝える。 ・友達の作業の状況を見て判断し声かけをする。	今日は分担を分かりやすく伝えることに気をつけて作業しました。BさんとDさんに伝えるときに1回じゃ伝わらなかったけど、見本を見せて伝えたので最初から見本を見せながら伝えられるようにしたいです。分担がうまくできてよかったです。
9月22日	・友達の作業の状況を見て判断し声かけをする。(+相手の意見も聞く。) ・見通しを持ち分担する。	今日は宴会準備のときに声かけをして相手の話を聞くことができました。相手の意見を聞いて判断するのができなかったのでもできるようにしていきたいです。少し疲れててあいさつ、返事があまりできなかったのでもなんとかできるようにしたいです。

仕事に慣れる、あいさつといったどの活動場所でも意識したい目標。

自分から報告したり、相談したりするといった他者との関係性を意識し、自ら発信する目標。

自ら発信することはもちろん、発信の仕方や相手を思いやることについても言及した目標。

あいさつや返事に関する自己評価。

自分から行動することや他者との関わりを意識したコメント。

仲間との関わりに関するコメント。仕事をよりよく進める上での仲間との関わり合いの重要性についての気づき。

仲間との関わり合いの中でも、相手のことや状況を考えること、わかりやすく伝えることの重要性への気づき。

5 総合考察

実践を通して、校外での作業学習において、体験を通して、生徒達は様々な思いや考えを持っていることが分かった。さらに、その中で、自己調整学習の考え方の中で取り上げられる2つの特徴的な部分が、生徒の貴重な学びの一つとなっていることがうかがえた。

一つは、生徒は、自身の思ったことや考えたことを記録したり、対話したりすることを通して、活動と自身の目標や課題とを結びつけて、活動に取り組むことにつながられていたことである。

さらに、そのサイクルを繰り返す中で、より具体的な目標やステップアップした目標となり、その生徒ならではの目標に変化していった。自己調整を「Plan-Do-See」のサイクルで丁寧に行い、学習を進めていくことにより、生徒の目標もより本人に則した具体的な目標立てにつながり、さらに活動する意義も明確になり、より自律的に学習に取り組めるのではないかと考える。

二つ目として、仲間や教師、受け入れ先の担当者といった学習場面における他者との相互作用の重要性が考えられる。岡田(2012)は、自己調整学習の過程において、単に独力で学習を進めるのではなく、仲間や教師との相互作用の中で自律的に学習を調整していくことの重要性について示唆している。校外での作業学習においても、職場という環境の中で、自身の省察とともに、教師や仲間との対話、受け入れ先の担当者からの助言等があることにより、生徒達は様々なことに気づき、自身の行動指針を明確にする。また、何のためにこの仕事を行っているのか、どのように役立っているのか等、自身の行っていることの価値を内在化させていくことにもつなげており、自律的な動機づけを高めるとともに、より広く深く学ぶことができているのではないかと考える。

特別支援学校学習指導要領解説総則等編(高等部)において、作業学習では「作業活動を中心にしながら、生徒の働く意欲を培い」とある。校外での作業学習では、「実際の働く場と他者との適切な相互作用を通して自己調整しながら学んでいくこと」自体が、社会に出て働く生活を送っていく上で大切な「働く意欲」について学ぶ機会となっていると考える。生徒が卒業後、職業生活を送っていく中では、自己調整する力、援助要請できる力、周囲との関係性を大切にできる力は重要であると考えられる。職場環境は、常に一定ではなく、変化する可能性のあるものである。校外での作業学習は、将来出会うであろう新たな職業への適応力を高めるための価値ある学びの場にもなることが考えられた。

その生徒の学びを下支えするのが担当教師であると考えられる。生徒の思いや考えに寄り添うとともに、周囲の教師への日常的な相談が、状況に合わせた生徒への的確な支援のための担当教師の積極的な行動を後押しする。校外での作業学習で学ぶ意義について考える、生徒へのよりよいアプローチを考える、受け入れ先とのよりよい連携について考える機会となり、それは生徒にとってもより充実した学びにつながると考えられた。

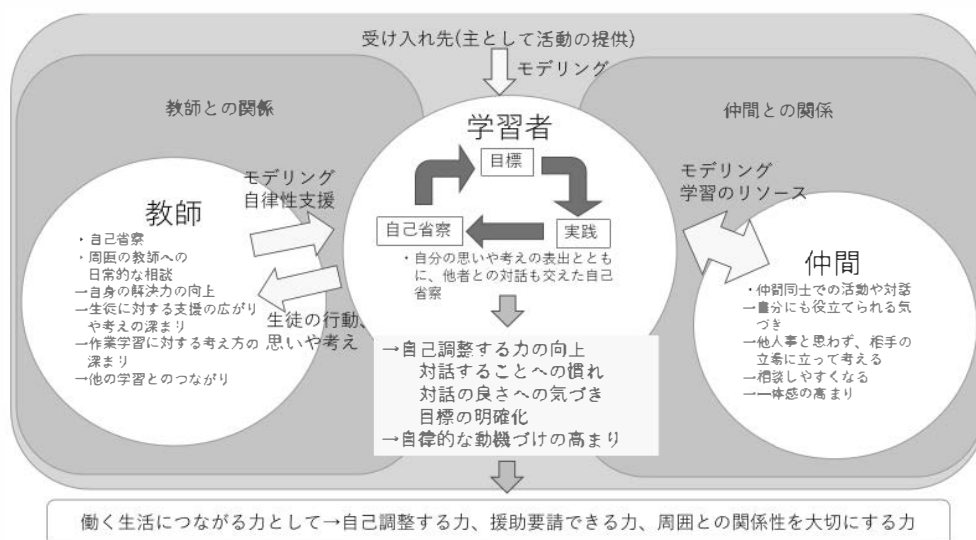


図2 実践から得られた校外での作業学習における生徒の学び